

若菜集

島崎藤村



こゝろなきうたのしらべは
ひとふさのぶだうのごとし
なさけあるてにもつまれて
あたゝかきさけとなるらむ

ぶだうだなふかくかゝれる
むらさきのそれにあらねど
こゝろあるひとのなさけに
かげにおくふさのみつよつ

そはうたのわかきゆるゑなり
あぢはひもいろもあさくて
おほかたはかみてすつべき

うたゝねのゆめのそらごと

一 秋の思

秋

秋は来ぬき

秋は来ぬ

一葉ひとはは花は露ありて

風の来て弾ひく琴の音に

青き葡萄ぶどうは紫の

自然の酒とかはりけり

秋は来ぬ

秋は来ぬ

おくれさきだつ秋草あきぐさも

みな夕霜ゆふしものおきどころ

笑ひの酒を悲みの

盃さかずきにこそつぐべけれ

秋は来ぬ

秋は来ぬ

くさきも紅葉もみぢするものを

たれかは秋に酔はざらめ

智恵ちえあり顔のさみしさに

君笛を吹けわれはうたはむ

初恋

まだあげ初めし前髪まへがみの

林檎りんごのもとに見えしとき

前にさしたる花櫛はなぐしの

花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて

林檎をわれにあたへしは

薄紅うすくれなゐの秋あきの実みに

人こひ初めしはじめなり

わがこゝろなきためいきの
その髪かみの毛けにかゝるとき
たのしき恋こひの盃さかずきを
君きみが情なさけに酌くみしかな

林檎畑りんごばたけの樹この下したに
おのづからなる細道ほそみちは
誰たが踏たみそめしかたみぞと
問とひたまふこそこひしけれ

狐きつねのわざ

庭にかくるゝ小狐の
人なきときに夜よるいでて

秋の葡萄の樹の影に

しのびてぬすむつゆのふさ

恋は狐にあらねども

君は葡萄にあらねども

人しれずこそ忍びいで

君をぬすめる吾わが心

髪を洗へば

髪を洗へば紫の

小草をぐさのまへに色みえて
足はなとりをあぐれば花鳥の
われしたがに随ふぜいふ風情あり

目あやぐもにながむれば彩雲の
まきてはひらくえまきもの絵巻物
手うまざけにとる酒は美酒の
若うれひき愁をたゝふめり

耳うたがみをたつれば歌神の
きたりて玉たまの簫ふえを吹き
口をひらけぼうたびとの
一ふしわれはこひうたふ

あゝかくまでにあやしくも
熱きこゝろのわれなれど
われをし君のこひしたふ
その涙にはおよばじな

君がこゝろは

君がこゝろは蟋蟀こほろぎの

風にさそはれ鳴くごとく

あさかげよ朝影清き花草はなぐさに

を惜しき涙をそぐらむ

それかきならず玉琴のたまごと

一つの糸のきはりさへ

君がこゝろにかぎりなき

しらべとこそはきこゆめれ

あゝなどかくは触れやすき

君が優しき心もて

かくばかりなる吾わがこひに

触れたまはぬぞ恨うらみなる

かさ
傘のうち

ふたり
二人してさすひとはり
一張の

傘に姿をつゝむとも

情なさけの雨のふりしきり

かわく間まもなきたもとかな

顔と顔とをうちよせて

あゆむとすればなつかしや

梅花ぼいかの油黒髪くろかみの

乱にほれて匂ふ傘のうち

恋ひとあめの一雨ぬれまさり

ぬれてこひしき夢の間まや

染めてぞ燃ゆる紅絹もみうらの

雨になやめる足まとひ

歌ふをきけば梅川よ

しばし情なさけを捨てよかし

いづこも恋たはぶに戯れて

それ忠兵衛ちゆうべえの夢がたり

こひしき雨よふらばふれ

秋の入日の照りそひて

傘の涙を乾ほきぬ間まに

手に手をとりて行きて帰らじ

秋に隠れて

わが手に植ゑし白菊の

おのづからなる時くれば

一もと花の暮陰ゆふぐれに

秋かくに隠れて窓にさくなり

知るや君

こゝろもあらぬ秋鳥あきどりの

声にもれくる一ふしを

知るや君

深くも澄すめる朝潮あさしほの

底にかくるゝ真珠しらたまを

知るや君

あやめもしらぬやみの夜に
静しづかにうごく星くづを

知るや君

まだ弾ひきも見ぬをとめこの
胸ねにひそめる琴の音を

知るや君

秋風の歌

さびしきはいつともわかぬ山里に

尾花みだれて秋かぜぞふく

しづかにきたる秋風の

西の海より吹き起り

舞ひたちさわぐ白雲しらくもの

飛びて行くへも見ゆるかな

暮影ゆふかげ高く秋は黄の

桐きりの梢こずえの琴ねの音に

そのおとなひを聞くときは

風のきたると知られけり

ゆふべ西風にしかぜ吹き落ちて

あさ秋の葉の窓に入り

あさ秋風の吹きよせて
ゆふべの鶉巢うづらに隠かくる

ふりさけ見れば青山も
あをやま

色はもみぢに染めかへて

霜葉しもばをかへす秋風の

空そらの明鏡かがみにあらはれぬ

清すずしいかなや西風の

まづ秋の葉を吹けるとき

さびしいかなや秋風の

かのもみぢ葉はにきたるとき

道を伝ふる婆羅門ばらもんの

西に東に散るごとく

吹き漂蕩ただよはす秋風に

飄ひるがへり行く木の葉はかな

朝羽あさばうちふる鷺鷹わしたかの

明闇天をゆくごとく

いたくも吹ける秋風の

羽はねに声あり力あり

見ればかしこし西風の

山の木この葉をはらふとき

悲しいかなや秋風の

秋の百葉ももはを落すとき

人は利劍つるぎを振ふるへども

げにかぞふればかぎりあり

舌は時世ときよをのゝしるも

声はたちまち滅ぶめり

高くも烈はげし野も山も

息吹いぶきまどはす秋風よ

世をかれぐとなすまでは

吹きも休やむべきけはひなし

あゝうらさびし天地あめつちの

壺つぼの中うちなる秋の日や
落葉はるがへと共に飄ひるがへる
風ゆくへの行衛ゆくへを誰か知る

雲のゆくへ

庭にたちいでたゞひとり
秋海棠しゅうかいどうの花を分け
空さらながむれば行く雲の
更さらに秘密ひらを聞きくかな

小詩二首

ゆふぐれしづかに

ゆめみんとて

よのわづらひより

しばしのがる

きみよりほかには

しるものなき

花かげにゆきて

こひを泣きぬ

すぎこしゆめぢを

おもひみるに

こひこそつみなれ

つみこそこひ

いのりもつとめも

このつみゆゑ

たのしきそのへと

われはゆかじ

なつかしき君と

てをたづさへ

くらき冥府よみまでも

かけりゆかん

しづかにてらせる

月のひかりの

などか絶間なく

ものおもはする

さやけきそのかけ

こゑはなくとも

みるひとの胸に

忍び入るなり

なさけは説とくとも

なさけをしらぬ

うきよのほかにも

朽ちゆくわがみ

あかさぬおもひと

この月かげと

いづれか声なき

いづれかなしき

強敵

一つの花に蝶ちようと蜘蛛くも

小蜘蛛は花を守りまも顔

小蝶は花に酔ひ顔に

舞へどもくすべぞなき

花は小蜘蛛のためならば

小蝶の舞をいかにせむまひ

花は小蝶のためならば

小蜘蛛の糸をいかにせむ

やがて一つの花散りて

小蜘蛛はそこに眠れども

羽翼つばさも軽き小蝶こそ

いづこともなくうせにけれ

人妻をしたへる男の山に登り其
女の家を望み見てうたへるうた

誰たれかとゞめん旅人たびびとの

あすは雲間くもまに隠るゝを

誰か聞くらん旅人の

あすは別れと告げましを

清きよき恋とや片かたし貝がひ

われのみものを思ふより

恋はあふれて濁にごるとも

君に涙をかけましを

人妻恋ひとつまふる悲しさを

君がなさけに知りもせば

せめてはわれを罪人つみびとと

呼びたまふこそうれしけれ

あやめもしらぬ憂うしや身は

くるしきこひの牢獄ひとやより

罪の鞭責しもとをのがれいで

こひて死ななんと思ふなり

誰たれかは花をたづねざる

誰かは色彩いろに迷はざる

誰かは前にさける見て

花を摘ま^つんと思はざる

恋の花にも戯^{たはむ}るゝ

嫉妬^{ねたみ}の蝶^{ちよう}の身ぞつらき

二つの羽^{はね}もをれくゝて

翼^{つばさ}の色はあせにけり

人の命を春の夜の

夢といふこそうれしけれ

夢よりもいやく深き

われに思ひのあるものを

梅の花さくころほひは

蓮はすさかばやと思ひわび
蓮の花さくころほひは
萩はぎさかばやと思ふかな

待つまも早く秋は来きて
わが踏む道に萩さけど
濁にごりて待てる吾恋わがは
清うらみき怨となりにけり

望郷

寺をのがれいでたる僧のうたひ
しそのうた

いざさらば

これをこの世のわかれぞと
のがれいでは住みなれし
みてら御寺の蔵裏くわりの白壁しろかべの
眼にもふたたび見ゆるかな

いざさらば

住めば仏のやどりさへ
ほのほ火炎いへの宅いへとなるものを
なぐさめもなき心より
流れて落つる涙かな

いざさらば

心の油濁るとも

ともしびたかくかきおこし

なさけは熱くもゆる火の

こひしき塵ちりにわれは焼けなむ

二 六人の処女をとめ

おえふ

処女をとめぞ経へぬるおほかたの
われは夢路ゆめぢを越えてけり
わが世の坂にふりかへり
いく山河やまかはをながむれば

若菜集

水静みづしづかなる江戸川の
ながれの岸にうまれいで

岸の桜の花影はなかげに

われは処女をとめとなりにつけり

みやこどりう

都鳥みやこどり浮く大川に

流れてそぐ川添かはぞひの

しろすみれ

白堊しろすみれさく若草わかぐさに

夢多かりし吾身わがかな

雲むらさきの九重ここのへの

大宮内せいらいようでんにつかへして

清涼殿せいらいようでんの春よの夜の

月の光に照らされつ

雲を彫め濤を刻り

霞をうかべ日をまねく

玉の台の欄干に

かゝるゆふべの春の雨

さばかり高き人の世の

耀くさまを目にも見て

ときめきたまふさまぐの

ひとりのころもの香をかげり

きらめき初むる暁星の

あしたの空に動くごと

あたりの光きゆるまで

さかえの人のさまも見き

天^{あま}つみそらを渡る日の

影かたぶけるごとくにて

名^なの夕暮に消えて行く

秀^{ひい}でし人の末路^{はて}も見き

春しづかなる御園^{みそのふ}生の

花に隠^なれて人を哭^なき

秋のひかりの窓^よに倚^より

夕雲とほき友を恋ふ

ひとりの姉をうしなひて

大宮内の門を出いで

けふ江戸川に来て見れば

秋はさみしきながめかな

桜の霜葉しもは黄に落ちて

ゆきてかへらぬ江戸川や

流れゆく水静かにて

あゆみは遅きわがおもひ

おのれも知らず世をふ経れば

若き命いのちに堪へかねて

岸のほとりの草をし藉き

微笑ほほゑみて泣く吾身かな

おきぬ

みそらをかける猛鷲あらわしの

人の処女をとめの身に落ちて

花の姿に宿やどかれば

風雨あらしに渴かわき雲うに饑うゑ

天翅あまかけるべき術すべをのみ

願くろかみふ心のなかれとて

黒髪くろかみ長き吾身こそ

うまれながらの盲目めしひなれ

芙蓉ふようを前さきの身とすれば

なみだ
泪は秋の花の露

をごと
小琴を前の身とすれば

うれひ
愁は細き糸の音

ささき
いま前の世は鷺の身の

つばさ
処女にあまる羽翼かな

あゝあるときは吾心

あらゆるものをなげうちて

あさぢふ
世はあぢきなき浅茅生の

やど
茂れる宿と思ひなし

すべ
身は術もなき蟋蟀の

よる
夜の野草にはひめぐり

ね
たゞいたづらに音をたてて

うたをうたふと思ふかな

色いろにわが身をあたふれば

処女のこゝろ鳥となり

恋に心をあたふれば

鳥の姿は処女にて

処女ながらも空そらの鳥

猛鷲あらわしながら人の身の

天あめと地つちとに迷ひゐる

身の定めこそ悲しけれ

おさよ

潮うしほさみしき荒磯あらいその
巖陰いはかげわれは生れけり

あしたゆふべの白駒しろこまと
故郷ふるさと遠きものおもひ

をかしくものに狂へりと
われをいふらし世のひとの

げに狂はしの身なるべき
この年までの処女をとめとは

うれひは深く手もたゆく

むすぼほれたるわが思^{おもひ}

流れて熱^{あつ}きわがなみだ

やすむときなきわがこゝろ

乱^{みだ}れてものに狂ひよる

心を笛の音^ねに吹かん

笛をとる手は火にもえて

うちふるひけり十^{とを}の指

音^ねにこそ渴^{かわ}け口唇^{くちびる}の

笛^{たづ}を尋^{たづ}ぬる風情^{ふぜい}あり

はげしく深きためいきに

笛の小竹をだけや曇るらん

髪は乱れて落つるとも

まづ吹き入るゝいき氣息を聴きけ

力をこめし一ふしに

黄楊つげのさしぐし櫛落ちてけり

吹けば流るゝ流るれば

笛吹き洗ふわが涙

短き笛ふしの節まの間まも

長き思おもひのなからずや

七しちつの情声しじろを得て

音ねをこそきかめ歌神うたがみも

われ喜よろこびを吹くときは

鳥こずゑも梢ねに音をとゞめ

怒いかりをわれの吹くときは

瀬せを行く魚ふちも淵ふちにあり

われ哀かなしみを吹くときは

獅子も涙をそぐらむ

われ楽たのしみを吹くときは

虫も鳴く音ねをやめつらむ

愛のこゝろを吹くときは

流るゝ水のたち帰り

悪にくみをわれの吹くときは

散り行く花も止とどまりて

慾よくの思おもひを吹くときは

心の闇やみの響ひびきあり

うたへ浮世うきよの一ふしは
笛の夢路のものぐるひ

くるしむなかれ吾友わがよ
しばしは笛の音ねに帰れ

落つる涙をぬぐひきて
静かにきゝね吾笛を

おくめ

こひしきまゝに家いを出で

こゝの岸よりかの岸へ
越えましものと来て見れば
千鳥鳴くなり夕まぐれ

こひには親も捨てはてて
やむよしもなき胸の火や
鬢びんの毛を吹く河風よ
せめてあはれと思へかし

河波かはなみ暗く瀬を早み
流れて巖いはに砕くだくるも
君を思へば絶間なき
恋の火炎ほのほに乾かわくべし

きのふの雨の小休をやみなく

水嵩みかさや高くまさるとも

よひくくになくわがこひの

涙の滝におよばじな

しりたまはずやわがこひは

花鳥はなとりの絵にあらじかし

空鏡かがみの印象かたち砂の文字

梢の風の音にあらじ

しりたまはずやわがこひは

雄々ををしき君の手に触れて

嗚呼あくちべに口紅をその口に

君にうつきでやむべきや

恋は吾身の社やしろにて

君は社の神なれば

君の祭壇つくゑの上ならで

なににいのちを捧さかげまし

砕くだかば砕け河波かはなみよ

われに命はあるものを

河波高く泳ぎ行き

ひとりの神にこがれなん

心のみかは手も足も

吾身はすべて火炎なりほのほ

思ひ乱れて嗚呼恋の

千筋ちすぢの髪ちすぢの波に流るゝ

おつた

花灰ほの見ゆる春の夜の

すがたに似たる吾命わがいのち

おぼろおぼろ ちちはは
朧々に父母は

二つの影と消えうせて

世みなしごに孤児の吾身こそ

影より出でし影なれや

たすけもあらぬ今は身は

若き聖ひじりに救はれて

人なつかしき前髪まへがみの

処女をとめとこそはなりにけれ

若き聖ひじりののたまはく

時を以待たむ君ならば

かの柿の実をとるなかれ

かくいひたまふうれしさに

ことしの秋もはや深し

まづその秋を見よやとて

聖に柿をすゝむれば

その口唇くちびるにふれたまひ

かくも色よき柿ならば

などかは早くわれに告げこぬ

若き聖ののたまはく

人の命の惜をしからば

嗚呼あかあの酒を飲あむなかれ

かくいひたまふうれしさに

酒なぐさめの一つなり

まづその春を見よやとて

聖に酒をすゝむれば

夢の心地に酔ひたまひ

かくも楽しき酒ならば

などかは早くわれに告げこぬ

若き聖ののたまはく

道行き急ぐ君ならば

迷ひの歌をきくなかれ

かくいひたまふうれしきに

歌も心の姿なり

まづその声をきけやとて

一ふしうたひいでければ

聖は魂たまも酔ひたまひ

かくも楽しき歌ならば

などかは早くわれに告げこぬ

若き聖ののたまはく

まことをさぐる吾身なり

道の迷まよひとなるなかれ

かくいひたまふうれしきに

なまけ情も道の一つなり

かゝる思おもひを見よやとて

わがこの胸に指ぎせば

聖は早く恋ひわたり

かくも樂しき恋ならば

などかは早くわれに告げこぬ

それ秋の日の夕まぐれ

そゞろあるきのこゝろなく

ふと目に入るを手にとれば

雪より白き小石なり

若き聖ののたまはく

智恵の石とやこれぞこの

あまりに惜しき色なれば

人に隠して今も放はなたじ

おきく

くろかみながく

やはらかき

をんなごころを

たれかしる

をとこのかたる

ことのはを

まこととおもふ

ことなかれ

をとめごころの

あさくのみ

いひもつたふる

をかしさや

みだれてながき

びん
鬢の毛を

黄楊つげの小櫛をぐしに

かきあげよ

あゝ月つきぐさの

きえぬべき

こひもするとは

たがことば

こひて死なんと

よみいでし

あつきなさけは

誰たがうたぞ

みちのためには

ちをながし

くには死ぬる

をとこあり

治兵衛はいづれ

恋か名か

忠兵衛も名の

ために果^はつ

あゝむかしより

こひ死にし

をとこのありと

しるや君

をんなごころは

いやさらに

ふかきなさけの

こもるかな

小春はこひに

ちをながし

梅川こひの

ために死ぬ

お七はこひの

ために焼け

高尾はこひの

ために果つ

かなしからずや

清姫は

蛇へびとなれるも

こひゆゑに

やさしからずや

佐容姫さよひめは

石となれるも

こひゆゑに

をとこのこひの

たはぶれは

たびにすてゆく

なさけのみ

こひするなかれ

をとめごよ

かなしむなかれ

わがともよ

こひするときと

かなしみと

いづれかながき

いづれみじかき

三 生のあけぼの

草枕

夕波くらく啼^なく千鳥

われは千鳥にあらねども

心の羽^{はね}をうちふりて

さみしきかたに飛べるかな

若き心の一筋^{ひとすぢ}に

なぐさめもなくなげきわび

胸の氷のむすぼれて

とけて涙となりにけり

蘆葉あしはを洗ふ白波の

流れて巖いはを出づること

思ひあまりて草枕

まくらのかずの今いくつ

かなしいかなや人の身の

なきなぐさめを尋ねたう侘わび

道なき森に分け入りて

などなき道をもとむらん

われもそれかやうれひかや

野末のすゑに山たにかげに谷蔭たにかげに

見るよしもなき朝夕の

光もなく秋暮れぬ

想おもひも薄く身も暗く

残れる秋の花を見て

行くへもしらず流れ行く

水に涙の落つるかな

身を朝雲あさぐもにたとふれば

ゆふべの雲の雨となり

身を夕雨ゆふあめにたとふれば

あしたの雨の風となる

されば落葉と身をなして

風に吹かれてひるがへ飄り

朝の黄雲きぐもにともなはれ

夜よる白河を越えてけり

道なき今の身なればか

われは道なき野を慕ひ

思ひ乱れてみちのくの

みやぎの宮城野にまで迷ひきぬ

心の宿やどの宮城野よ

乱れて熱き吾身わがには

日影も薄く草枯れて

荒れたる野こそうれしけれ

ひとりさみしき吾耳は

吹く北風を琴ことと聴きき

悲み深き吾目には

色彩いろなき石も花と見き

あゝ孤独ひとりみの悲痛かなしきを

味ひ知れる人ならで

誰たれにかたらん冬の日の

かくもわびしき野のけしき

都のかたをながむれば

空冬雲に覆おほはれて

身にふりかゝる玉霰たまあられ

袖そでの氷と閉ぢあへり

みぞれまじりの風つよ勁く

小川の水の薄氷

氷のしたに音するは

流れて海に行く水か

啼ないて羽風はかせもたのもしく

雲に隠るゝかさゝぎよ

光もうすき寒空さむぞらの

汝なれも荒れたる野にむせぶ

涙も凍る冬の日の

光もなくて暮れ行けば

人めも草も枯れはてて

ひとりさまよふ吾身かな

かなしや酔ふて行く人の

踏めばくづるゝ霜柱

なにを酔ひ泣く忍び音ねに

声もあはれのその歌は

うれしや物の音を弾ねきて

野末をかよふ人の子よ

声調しらべひく手も凍りはて

なに門かどづけの身の果はてぞ

やさしや年もうら若く

まだ初恋のまじりなく

手に手をとりにて行く人よ

なにを隠るゝその姿

野のさみしきに堪へかねて

霜と霜との枯草の

道なき道をふみわけて

きたれば寒し冬の海

朝は海辺うみべの石の上にへ

こしうちかけてふるさとの

都のかたを望めども

おとなふものは濤なみばかり

暮はさみしき荒磯あらいその

潮うしほを染めし砂に伏し

日の入るかたをながむれど

湧わきくるものは涙のみ

さみしいかなや荒波の

岩に砕^{くだ}けて散れるとき

かなしいかなや冬の日の

潮^{うしほ}とともに帰るとき

誰^{たれ}か波路を望み見て

そのふるさとを慕はざる

誰か潮の行くを見て

この人の世^{をし}を惜まざる

曆^{こよみ}もあらぬ荒磯の

砂路にひとりさまよへば

みぞれまじりの雨雲の

落ちて潮となりにけり

遠く湧きくる海の音

慣れてきみしき吾耳に

怪しやもるゝものねの音は

まだうらわかき野路の鳥

鳴呼あめづらしのしらべぞと

声のゆくへをたづぬれば

緑の羽はねもまだ弱よき

それも初音はつねか鶯うぐひすの

春きにけらし春よ春

まだ白雪の積れども

若菜の萌^もえて色青き
こゝちこそすれ砂の上^へに

春きにけらし春よ春

うれしや風に送られて

きたるらしとや思へばか

梅が香^かぞする海の辺^べに

磯^{いそ}辺に高き大巖^{おほいは}の

うへにのぼりてながむれば

春やきぬらん東雲^{しののめ}の

潮^{しほ}の音^ね遠き朝ぼらけ

春

一 たれかおもはむ

たれかおもはむうぐひす鶯の

涙もこほる冬の日

若き命は春の夜の

花にうつろふ夢の間まと

あゝよしさらば美酒うまさけに

うたひあかさん春の夜を

梅のにほひにめぐりあふ

春を思へばひとしれず

からくれなるのかほばせに

流れてあつきなみだかな

あゝよしさらば花影に

うたひあかさん春の夜を

わがみひとつもわすられて

おもひわづらふこゝろだに

春のすがたをとめくれば

たもとにほふ梅の花

あゝよしさらばこと琴のね音に

うたひあかさん春の夜を

二 あけぼの

紅くれなる細くたなびけたる

雲とならばやあけぼのの

雲とならばや

やみを出いでては光ある

空とならばやあけぼのの

空とならばや

春の光を彩いろどれる

水とならばやあけぼのの

水とならばや

鳩はとに履ふまれてやはらかき
草とならばやあけぼのの

草とならばや

三 春は来ぬ

春はきぬ

春はきぬ

初音はつねやさしきうぐひすよ

こぞに別離わかれを告げよかし

谷間に残る白雪よ

葬りかくせ去歳こぞの冬

春はきぬ

春はきぬ

さみしくさむくことばなく
まづしくくらくひかりなく
みにくくおもくちからなく
かなしき冬よ行きねかし

春はきぬ

春はきぬ

浅みどりなる新草よ
にひぐさ
とほき野面のもせを画ゑがけかし
さきては紅あかき春花はるばなよ

樹々の梢きぎ こそぎを染めよかし

春はきぬ

春はきぬ

霞かすみよ雲ゆるよ動きいで

氷れる空をあたくめよ

花かの香かおくる春風よ

眠れる山を吹きさませ

春はきぬ

春はきぬ

春あさをよせくる朝汐あさしほよ

蘆あしの枯葉かれはを洗あひ去れ

霞に酔へる雛鶴ひなづるよ

若きあしたの空に飛べ

春はきぬ

春はきぬ

うれひの芹せりの根を絶えて

氷れるなみだ今いづこ

つもれる雪の消えうせて

けふの若菜と萌もえよかし

四 眠れる春よ

ねむれる春ようらわかき

かたちをかくすことなかれ
たれこめてのみけふの日を
なべてのひとのすぐすまに
さめての春のすがたこそ
また夢のまの風情ふぜいなれ

ねむげの春よさめよ春

さかしきひとのみざるまに

若紫の朝霞

かすみの袖そでをみにまとへ

はつねうれしきうぐひすの

鳥のしらべをうたへかし

ねむげの春よさめよ春

ふゆのこほりにむすぼれし
ふるきゆめぢをさめいでて
やなぎのいとのみだれがみ
うめのはなぐしさしそへて
びんのみだれをかきあげよ

ねむげの春よさめよ春

あゆめばたにの早さわらびの
したもえいそぐ汝ながあしを
かたくもあげよあゆめ春
たえなるはるのいきを吹き
こぞめの梅の香ににほへ

五 うてや鼓

うてや鼓つづみの春の音

雪にうもるゝ冬の日の

かなしき夢はとぎされて

世は春の日とかはりけり

ひけばこそめの春霞

かすみの幕をひきとちて

花と花とをぬふ糸は

けさもえいでしあをやなぎ

霞のまくをひきあけて

春をうかゞふことなかれ

はなさきにはふ蔭をこそ

春の台うてなといふべけれ

小蝶こちようよ花にたはぶれて

優しき夢をみては舞ひ

酔よふて羽袖はそでもひらくと

はるの姿をまひねかし

緑のはねのうぐひすよ

梅の花笠ぬひそへて

ゆめ静しづかなるはるの日の

しらべを高く歌へかし

小詩

くめどつきせぬ

わかみづを

きみとくまゝし

かのいづみ

かわきもしらぬ

わかみづを

きみとのまゝし

かのいづみ

かのわかみづと
みをなして
はるのこゝろに
わきいでん

かのわかみづと
みをなして
きみとながれん
花のかげ

明星

浮べる雲と身をなして
あしたの空そらに出でざれば
などしるらめや明星の
光の色いろのくれなるを

朝あさの潮うしほと身をなして
流れて海に出でざれば
などしるらめや明星の
清すみて哀かなしききらめきを

なにかこひしき暁あかぼし星の
空むなしき天あまの戸を出でて
深くも遠きほとりより

人の世近く来るとはきた

潮うしほの朝のあさみどり

みなそこ

水底深き白石を

星の光すに透かし見て

朝よはひの齡よはひを数ふべし

野の鳥ぞ啼なく山河やまかはも

ゆふべの夢をさめいでて

細く棚たなび引くしのゝめの

姿をうつす朝ぼらけ

小夜さよには小夜のしらべあり

朝には朝の音ねもあれど

星の光の糸をの緒をに

あしたの琴ことは静しづかなり

まだうら若き朝の空

きらめきわたる星のうち

いとく若き光をば

名なづけましかば明星と

潮音

わきてながるゝ

やほじほの

そこにいざよふ
うみの琴

しらべもふかし
もゝかはの

よろづのなみを
よびあつめ

ときみちくれば
うらゝかに

とほくきこゆる
はるのしほのね

酔歌

旅と旅との君や我

君と我とのなかなれば

酔たもとふて袂うたぐさの歌草を

醒さめての君に見せばやな

若き命も過ぎぬ間まに

楽しき春は老いやすし

誰たが身たからにもてる宝ぞや

君くれなるのかほばせは

君がまなこに涙あり

君が眉うれひには憂愁あり

堅かたく結べるその口に

それ声も無きなげきあり

名もなき道を説とくなかれ

名もなき旅を行くなかれ

甲斐かひなきことをなげくより

来りきたて美うまき酒に泣け

光もあらぬ春の日の

独りさみしきものぐるひ

悲しき味の世の智恵に

老いにけらしな旅人よ

心の春の燭火ともしびに

若き命を照らし見よ

さくまを待たで花散らば

哀かなしからずや君が身は

わきめもふらで急ぎ行く

君の行衛ゆくへはいづこぞや

琴花酒ことはなさけのあるものを

とゞまりたまへ旅人よ

二つの声

朝

たれか聞くらん朝の声

眠ねむりと夢を破りいで

彩あやなす雲にうちのりて

よろづの鳥に歌はれつ

天のかなたにあらはれて

東の空に光あり

そこに時ときあり始はじめあり

そこに道あり力あり

そこに色いろあり詞ことばあり

そこに声あり命あり

そこに名ありとうたひつゝ

みそらにあがり地にかけり

のこんの星ともろともに

光のうちうちに朝ぞ隠るゝ

暮

たれか聞くらん暮よるの声

霞つばきりの翼雲つばきりの帯

煙ころもの衣露そでの袖

つかれてなやむあらそひを

闇やみのかなたなに投なげ入れて

夜つかひの使つかひの蝙蝠かはほりの

飛とぶ間まも声こゑのをやみなく

こゝこゝに影かげあり迷まよひあり

こゝこゝに夢ゆめあり眠ねむりあり

こゝに闇あり休息ありやすみ

こゝに永ながきあり遠きあり

こゝに死ありとうたひつゝ

草木にいこひ野にあゆみ

かなたに落つる日とともに

色なき闇に暮ぞ隠るゝ

哀歌

中野逍遙をいたむ

『秀才香骨幾人憐、秋入長安夢愴然、琴台旧譜壚前柳、風流銷
尽二千年』、これ中野逍遙しゅうえんじゅうぜつが秋怨十絶の一なり。逍遙字は威卿、
小字重太郎、予州宇和島の人なりといふ。文科大学の異材なり

しが年僅かに二十七にしてうせぬ。逍遙遺稿正外二篇、みな紅
心の余唾にあらざるはなし。左に掲ぐるはかれの清怨を写せし
もの、『寄語残月休長嘆、我輩亦是艷生涯』、合せかゝげてこの
秀才を追慕するのこゝろをとゞむ。

思君九首

中野逍遙

思君我心傷

思君我容瘁

中夜坐松蔭

露華多似淚

思君我心悄

思君我腸裂

昨夜涕淚流

今朝尽成血

示君錦字詩

寄君鴻文冊

忽覺筆端香

窗外梅花白

為君調綺羅

為君築金屋

中有鴛鴦囀

長春夢百祿

贈君名香篋

忝記韓壽恩

休將秋扇掩

明月照眉痕

贈君雙臂環

寶玉值千金

一鑄不乖約

一題勿變心

訪君過台下

清宵琴響搖

佇門不敢入

恐乱月前調

千里轉金鶯

春風吹綠野

忽發頭屋桃

似君三両朶

嬌影三分月

芳花一朵梅

渾把花月秀

作君玉膚堆

かなしいかなや流れ行く

水になき名をしるすとして

今はた残る歌反古の

ながき愁うれひをいかにせむ

かなしいかなやする墨すみの
いろに染めてし花の木
の
君がしらべの歌の音に
薄き命のひゞきあり

かなしいかなや前まへの世は
みそらにかゝる星の身の
人の命のあさぼらけ
光も見せでうせにしよ

かなしいかなや同じ世に
生れいでたる身を持ちて
友の契ちぎりも結ばずに

君は早くもゆけるかな

すゞしき眼まなこつゆを帯び

葡萄ぶどうのたまとまがふまで

その面影をつたへては

あまりに妬ねたき姿かな

同じ時世ときよに生れきて

同じいのちのあさぼらけ

君からくれなるの花は散り

われ命やへむぐらあり八重葎

かなしいかなやうるはしく

さきそめにける花を見よ

いかなればかくとゞまらで
待たで散るらんさける間まも

かなしいかなやうるはしき

なさけもこひの花を見よ

いとくゝ清きそのこひは

消ゆとこそ聞けいと早く

君し花とにあらねども

いな花よりもさらに花

君しこひとにあらねども

いなこひよりもさらにこひ

かなしいかなや人の世に

あまりに惜しき才ざえなれば

病やまひに塵ちりに悲かなしみに

死にまでそしりねたまるゝ

かなしいかなやはたとせの

ことばの海のみなれ棹ざを

磯たかじほにくだくる高潮たかじほの

うれひの花とちりにけり

かなしいかなや人の世の

きづなも捨てて嘶いななけば

つきせぬ草に秋は来て
声も悲しき天の馬

かなしいかなや音を遠み^ね
流るゝ水の岸にさく

ひとつの花に照らされて
飄り行く一葉舟^{ひるがへ}
^{ひとはがね}

四 深林の逍遙しやうよう、其他

深林の逍遙

力を刻むきざ木匠こだくみの

うちふる斧のあとを絶え

春の草花彫刻くさばなほりものの

鑿のの韻にほひもとゞめじな

いろさまざまの春の葉に

青一筆あをひとふでの痕あともなく

千枝ちえにわかるゝ赤樟あかくすも

おのづからなるすがたのみ

檜ひのきは荒し杉直し

五葉は黒し椎しひの木の

枝をまじゆる白樫しろかしや

栲あふちは茎をよこたへて

枝と枝ともゆる火の

なかにやさしき若楓わかかへで

山精やまびこ

ひとにしられぬ

たのしみの

ふかきはやしを

たれかする

ひとにしられぬ

はるのひの

かすみのおくを

たれかする

木精^{こだま}

はなのむらさき

はのみどり

うらわかぐさの

のべのいと

たくみをつくす

おほはた
大機の

をさ
梭のはやしに

きたれかし

山精

かのもえいづる

くさをふみ

かのわきいづる

みづをのみ

かのあたらしき
はなに忍ひ
はるのおもひの
なからずや

木精

ふるきころもを
ぬぎすてて
はるのかすみを
まとへかし

なくうぐひすの

ねにいでて

ふかきはやしに

うたへかし

あゆめば蘭らんの花を踏み

ゆけば楊梅袖やまももに散り

袂たもとにまとふ山葛やまくづの

葛のうら葉をかへしては

女蘿ひかげの蔭のやまいちご

色よき実こそ落ちにけれ

岡やまつゞき隈くまぐま々も

いとなだらかに行き延のびて

ふかきはやしの谷あひに

乱れてにほふふぢばかま
谷に花さき谷にちり

人にしられず朽くつるめり

せまりて暗はき峽やまより

やゝひらけたる深山みやま木の

春は小枝こえだのたゝずまひ

しげりて広き熊笹の

葉末をふかくかきわけて

谷のかなたにきて見れば

いづくに行くか滝川よ

声もさびしや白糸の

青いはほき巖いはほに流れ落ち

若ましらき猿ましらのためにだに

音をおととゞむる時ぞなき

山精

ゆふぐれかよふ

たびびとの

むねのおもひを

たれかする

友にもあらぬ

やまかほの

はるのこゝろを

たれかする

木精

夜をなきあかす

かなしみの

まくらにつたふ

なみだこそ

ふかきはやしの

たにかげの

そこにながるゝ

しづくなれ

山精

鹿はたふるゝ

たびごとに

妻こふこひに

かへるなり

のやまは枯るゝ

たびごとに

ちとせのはるに

かへるなり

木精

ふるきおちばを

やはらかき

青葉のかけに

葬れよ

ふゆのゆめぢを

さめいでて

はるのはやしに

きたれかし

今しもわたる深山みやまかぜ

春はしづかに吹きかよふ

林の簫しょうの音ねをきけば

風のしらべにさそはれて

みれどもあかぬ白妙しろたへの

雲はそでの羽袖はそでの深山木の

千枝ちえだにかゝりたちはなれ

わかれ舞ひゆくすがたかな

樹々きぎをわたりて行く雲の

しばしと見ればあともなき

高き行衛ゆくへにいぎなはれ

千々にめぐれる巖影いはかげの

花にも迷ひ石よに倚り

流るゝ水の音をきけば

山は危ふく石わかれ

削りてなせる青巖あをいはに

砕けて落つる飛潭たきみづの

湧きくる波の瀬を早み

花やかにさす春の日の

光燭ひかり照りそふ水けぶり

独り苔こけむす岩を攀よぢ

ふるふあゆみをふみしめて

浮べる雲をうかゞへば

下にとゞろく飛潭たきみづの

澄むいとまなき岩波は

落ちていづくに下るらん

なにをいぎよふ

むらさきの

ふかきはやしの

はるがすみ

なにかこひしき

いはかけを

ながれていづる

いづみがは

木精

かくれてうたふ

野の山の

こゑなきこゑを

きくやきみ

つゝむにあまる

はなかげの

水のしらべを

しるやきみ

山精

あゝながれつゝ

こがれつゝ

うつりゆきつゝ

うごきつゝ

あゝめぐりつゝ

かへりつゝ

うちわらひつゝ

むせびつゝ

木精

いまひのひかり

はるがすみ

いまはなぐもり
はるのあめ

あゝあゝはなの

つゆに酔ひ

ふかきはやしに

うたへかし

ゆびをりくればいつたびも

かはれる雲をながむるに

白きは黄なりなにをかも

もつ筆にせむ色彩いろあやの

いつしか淡く茶を帯びて

雲くれなるとかはりけり

あゝゆふまぐれわれひとり

たどる林もひらけきて

いと静かなる湖の

岸辺にさける花躑躅はなつづじ

うき雲ゆけばかげ見えて

水に沈める春の日や

それ紅くれなゐの色染めて

雲紫むらさきとなりぬれば

かげさへあかき水鳥の

春のみづうみ岸の草

深き林や花つゝじ

迷ふひとりのわがみだに

ふかむらさきくれなゐ
深紫の紅の

あや
彩にうつろふ夕まぐれ

母を葬るのうた

うき雲はありともわかぬ大空の

月のかげよりふるしぐれかな

きみがはかばに

きゞくあり

きみがはかばに

さかきあり

くさはにつゆは

しげくして

おもからずやは

そのしるし

いつかねむりを

さめいでて

いつかへりこん

わがはゝよ

紅あから羅ひく子も

ますらをも

みなちりひぢと

なるものを

あゝさめたまふ

ことなかれ

あゝかへりくる

ことなかれ

はるははなさき

はなちりて

きみがはかばに

かゝるとも

なつはみだるゝ

ほたるびの

きみがはかばに

とべるとも

あきはさみしき

あきさめの

きみがはかばに

そぐとも

ふゆはましろに

ゆきじもの

きみがはかばに

こほるとも

とほきねむりの

ゆめまくら

おそるゝなかれ

わがはゝよ

合唱

一 暗香あんこう

はるのよはひかりはかりとおもひしを

しろきやうめのさかりなるらむ

姉

わかきいのちの

をしければ

やみにも春の

香かに酔はん

せめてこよひは

さほひめよ

はなさくかげに

うたへかし

妹

そらもゑへりや

はるのよは

ほしもかくれて

みえわかず

よめにもそれと

ほのしろく

みだれてにほふ

うめのはな

姉

はるのひかりの

こひしさに

かたちをかくす

うぐひすよ

はなさへしるき

はるのよの

やみをおそるゝ

ことなかれ

妹

うめをめぐりて

ゆくみづの

やみをながるゝ

せゝらぎや

ゆめもさそはぬ

香^かなりせば

いづれかよるに

にははまし

姉

こぞのこよひは

わがともの

うすこうばいの

そめごろも

ほかげにうつる

さかづきを

こひのみゑへる

よなりけり

妹

こぞのこよひは

わがともの

なみだをうつす

よのなごり

かげもかなしや

木下川きねがはに

うれひしづみし

よなりけり

姉

こぞのこよひは

わがともの

おもひははるの

よのゆめや

よをうきものに

いでたまふ

ひとめをつゝむ

よなりけり

妹

こぞのこよひは

わがともの

そでのかすみの

はなむしろ

ひくやことのね

たかじほを

うつしあはせし

よなりけり

姉

わがみぎのてに

くらぶれば

やさしきなれが

たなごころ

ふるればいとゞ

やはらかに

もゆるかあつく

おもほゆる

妹

もゆるやいかに

こよひはと

とひたまふこそ

うれしけれ

しりたまはずや

うめがかに

わがうまれてし

はるのよを

二 蓮花舟れんげぶね

しはくもこほるゝつゆははちすはの

うきはにのみもたまりけるかな

姉

あゝはすのはな

はすのはな

かげはみえけり

いけみづに

ひとつのふねに

さをさして

うきはをわけて

こぎいでん

妹

かぜもすゞしや

はがくれに

そこにもしろし

はすのはな

こゝにもあかき

はすばなの

みづしづかなる

いけのおも

姉

はすをやさしみ

はなをとり

そでなひたしそ

いけみづに

ひとめもはぢよ

はなかげに

なれが乳房ちちぶさの

あらはるゝ

妹

ふかくもすめる

いけみづの

葉にすれてゆく

みなれぎを

なつぐもゆけば

かげみえて

はなよりはなを

わたるらし

姉

荷葉はすはにうたひ

ふねにのり

はなつみのする

なつのゆめ

はすのはなふね

さをとめて

なにをながむる

そのすがた

妹

なみしづかなる

はなかげに

きみのかたちの

うつるかな

きみのかたちと

なつばなと

いづれうるはし

いづれやさしき

はるあきにおもひみたれてわきかねつ
ときにつけつゝうつるこゝろは

妹

たのしからずや

はなやかに

あきはいりひの

てらすとき

たのしからずや

ぶだうばの

はごしにくもの

かよふとき

姉

やさしからずや

むらさきの

ぶだうのふさの

かゝるとき

やさしからずや

にひぼしの

ぶだうのたまに

うつるとき

妹

かぜはしづかに

そらすみて

あきはたのしき

ゆふまぐれ

いつまでわかき

をとめごの

たのしきゆめの

われらぞや

姉

あきのぶだうの

きのかげの

いかにやさしく

ふかくとも

てにてをとりにて

かげをふむ

なれとわかれて

なにかせむ

妹

げにやかひなき

くりごとも

ぶだうにしかじ

ひとふさの

われにあたへよ

ひとふさを

そこにかゝれる

むらさきの

姉

われをしれかし

えだたかみ

とゞかじものを

かのふさは

はかけのたまに

てはふれて

わがさしぐしの

おちにけるかな

四

たかどの
高樓

わかれゆくひとををしむとこよひより

とほきゆめちにわれやまとはん

妹

とほきわかれに

たへかねて

このたかどのに

のぼるかな

かなしむなかれ

わがあねよ

たびのころもを

とゝのへよ

姉

わかれといへば

むかしより

このひとのよの

つねなるを

ながるゝみづを

ながむれば

ゆめはづかしき

なみだかな

妹

したへるひとの

もとにゆく

きみのうへこそ

たのしけれ

ふゆやまこえて

きみゆかば

なにをひかりの

わがみぞや

姉

あゝはなとりの

いろにつけ

ねにつけわれを

おもへかし

けふわかれては

いつかまた

あひみるまでの

いのちかも

妹

きみがさやけき

めのいろも

きみくれなるの

くちびるも

きみがみどりの

くろかみも

またいつかみん

このわかれ

姉

なれがやさしき

なぐさめも

なれがたのしき

うたごゑも

なれがこゝろの

ことのねも

またいつきかん

このわかれ

妹

きみのゆくべき

やまかはは

おつるなみだに

みえわかず

そでのしぐれの

ふゆのひに

きみにおくらん

はなもがな

姉

そでにおほへる

うるはしき

ながかほばせを

あげよかし

ながくれなるの

かほばせに

ながるゝなみだ

われはぬぐはん

梭をさ
の音ね

梭の音を聞くべき人は今いつこ

心を糸により初そめて

涙ににじむ木綿もめん縞

やぶれし窓まどに身をなげて

暮れ行く空をながむれば

ねぐらに急ぐ村鴉むらがらす
連つれにはなれて飛ぶ一羽
あとを慕ふてかあくと

かもめ

波に生れて波に死ぬ
情なさけの海のかもめどり
恋おほなみの激浪たちさわぎ
夢むすぶべきひまもなし

闇くらき潮うしほの驚きて
流れて帰るわだつみの

鳥の行衛ゆくへも見えわかぬ
波にうきねのかもめどり

流星

門かどにたち出いでたゞひとり
人待ち顔のさみしさに
ゆふべの空をながむれば
雲の宿りも捨てはてて
何かこひしき人の世に
流れて落つる星一つ

君と遊ばん

君と遊ばん夏の夜の
青葉の影の下すゞみ
短かき夢は結ばずも
せめてこよひは歌へかし

雲となりまた雨となる
昼の愁うれひはたえずとも
星の光をかぞへ見よ
楽たのしみのかず夜よは尽きじ

夢かうつゝか天あまの川がは
星に仮寝の織姫の

ひゞきもすみてこひわたる
をさ とほね
梭の遠音を聞かめやも

昼の夢

はなたちばな 花橘の袖の香の
そで か

みめうるはしきをとめごは

まひる 真昼に夢を見てしより

さめて忘るゝ夜のならひ

まひる 白日の夢のなぞもかく

忘れがたくはありけるものか

ゆめと知りせばなまなかに

さめざらましを世に出^いでて
うらわかぐきのうらわかみ
何をか夢の名残ぞと

問はゞ答へん目さめては
熱き涙のかわく間もなし

東西南北

男ごころをたとふれば
つよくもくさをふくかぜか
もとよしかぜのみにしあれば
きのふは東けふは西

女ごころをたとふれば
かぜにふかるゝくさなれや
もとよりくさのみにしあれば
きのふは南けふは北

懷古

あま かはら
天の河原にやほよろづ
ちよろづ神のかんつどひ
つどひいませしあめつちの
はじめ
始のときを誰か知る

おほがみ あまぐも
それ大神の天雲の

八重かきわけて行くごとく

野の鳥ぞ啼く東路の

な
あづまぢ
うすひ

碓氷の山にのぼりゆき

日は照らせども影ぞなき

あがつま

吾妻はやとこひなきて

熱き涙をそゞぎてし

みこと

尊の夢は跡も無し

大和の国の高市の

やまと
いかづちやま

たかいち
みゆき

雷山に御幸して

あまぐも

天雲のへにいほりせる

くるま

御輦のひゞき今いづこ

目をめぐらせばさゝ波や

志賀の都は荒れにしと

むかしを思ふ歌人の

澄める怨をなにかせん

春は霞める高台に

のぼりて見ればけぶり立つ

民のかまどのながめさへ

消えてあとなき雲に入る

冬はしぐるゝ九重の

大宮内のともしびや

さむさは雪に凍る夜の
竜たつのころもはいろもなし

むかしは遠き船いくさ

人の血潮ちしほの流るとも

今はむなしきわだつみの

まんくとしてきはみなし

むかしはひろき関が原

つるぎに夢を争へど

今は寂さびしき草のみぞ

ばうくとしてはてもなき

われいま今秋の野にいでて

奥山おくやま高くのぼり行き

都のかたを眺むれば

あゝあゝ熱きなみだかな

白壁しろかべ

たれかしるらん花ちかき

高楼たかどのわれはのぼりゆき

みだれて熱きくるしみを

うつしいでけり白壁に

唾つばにしるせし文字なれば

ひとしれずこそ乾きけれ

あゝあゝ白き白壁に

わがうれひありなみだあり

四つの袖そで

をとこの氣息いきのやはらかき

お夏の髪にかゝるとき

をとこの早きためいきの

霰あられのごとくはしるとき

をとこの熱き手の掌ひらの

お夏の手にも触るゝとき

をとこの涙ながれいで
お夏の袖にかゝるとき

をとこの黒き目のいろの

お夏の胸に映るとき

をとこの紅あかき口唇くちびるの

お夏の口にもゆるるとき

人こそしらね鳴呼あ恋あの

ふたりの身より流れいで

げにこがるれど慕へども

やむときもなき清十郎

天馬

序

老おいは若わかきは越こしかたに

文ふみに照あらせどまれらなる

奇くしきためしは箱根山

弥やよひ生の末のゆふまぐれ

南あまの天との戸をいでて

よなく北の宿に行く

血くれなゐの深紅の星の影

かたくななりし男さへ

星の光を眼に見ては

身にふりかゝる凶禍まがごとの

天の兆しるしとうたがへり

総鳴そうなきに鳴く鶯うぐひすの

にほひいでたる声をあげ

さへづり狂ねふ音をきけば

げにめづらしき春の歌

春を得知らぬ処をとめ女さへ

かのうぐひすのひとこゑに

枕の紙のしめりきて

人なつかしきおもひあり

まだ時ならぬ白百合の

籬まがきの陰かげにさける見て

九十九つくもの翁おきなうつし世の

こゝろの慾の夢を恋ひ
音をだにきかぬ雛鶴の
軒の榎樹えのきに来て鳴けば
寢覚ねざめの老嫗おうな後の世の
花の台うてなに泣きまどふ
空にかゝれる星のいろ
春さきかへる夏花なつはなや
是これわぎはひにあらずして
よしや兆しるしといへるあり
なにを酔ひ鳴く春鳥はるどりよ
なにを告げくる鶴つるの声
それ鳥ねの音うらなに卜ひて
よろこびありと祝ふあり

高き聖ひつりのこの村に

声をあげさせたまふらん

世を傾けむ麗人よきひとの

茂れる賤しづの春草はるぐさに

いでたまふかとのゝしれど

誰かにひぼししるらん新星の

まことの北をさししめし

さみしき蘆あしの湖みづうみの

沈める水うに映つるとき

名もなき賤の片びさし

春の夜風の音を絶え

村の南のかたほとり

その夜生れし牝めの馬は

流るゝ水の藍染あみぞめの

青毛あをげやさしき姿なり

北をに生れし雄の馬の

栗毛にまじる紫は

色あけぼのの春霞

光をまとふ風情ふぜいあり

星のひかりもをさまりて

樽うはさに残る鶴の音や

啼く鶯に花ちれば

嗚呼この村に生れてし

馬のありとや問ふ人もなし

あな天雲あまぐもにともなはれ

緑の髪をうちふるひ

雄馬は人に随したがひて

箱根の嶺みねを下りけりくだ

胸は踊りて八百潮をどのやほじほ

かの蒼溟わだつみに湧くごとく

喉のどはよせくる春濤はるなみを

飲めども渴かわく風情あり

目はひさかたの朝の星

睫毛まつげは草の浅緑あさみどり

うるほひ光る眼瞳ひとみには

千里ちさとの外ほかもほがらにて

東に照らし西に入る

天つみそらを渡る日の

朝日夕日の行衛ゆくへさへ

雲の絶間に極むらん

二つの耳をたとふれば

いと幽かすかなる朝風に

そよげる草の葉のごとく

蹄ひづめの音をたとふれば

紫金しこんの色のやきがねを

高くも叩たたく響あり

狂へば長き鬣たてがみの

うちふりうちふる乱れ髪

燃えてはめぐる血の潮しほの

流れて躡る春の海をど

噴く紅の光にははくれなる

火炎の氣息もあらだちてほのほいき

深くも遠き嘶声はいななき

大神の住む梁のおほがみ うつぼり

塵を動かす力ありちり

あゝ朝鳥の音をきゝてあさとり

富士の高根の雪に鳴き

夕つげわたる鳥の音に

木曾の御嶽の巖を越えみたけ いは

かの青雲に嘶きてあをぐも いななき

天より天の電影のそら そら いなづま

光の末に隠るべき

雄馬の身にてありながら

なさけもあつくなつかしき

あるじ主人のあとをとめくれば

箱根も遠し三井寺や

日もあたたか暖に花深く

さゝなみ青き湖の

岸の此こちこち彼草を行く

天の雄馬のすがたをば

誰かは思ひ誰か知る

しらずや人の天雲にあまぐも

歩むためしはあるものを

天馬おの下りて大土おほつちに

歩むためしのなからめや

見よ藤の葉の影深く

岸の若草香かにいでて

春花に酔ふ蝶ちようの夢

そのかけを履ふむ雄馬には

一つの紅あかき春花はるはなに

見えざる神やどりの宿あり

一つうつろふ野の色に

つきせぬ天のうれひあり

嗚呼わしたか鷲鷹たかの飛ぶ道に

高く懸かかれる大空の

無限むげんの絃つるに触れて鳴り

男神をがみ女神めがみに戯たはむれて

照る日の影の雲に鳴き

空に流るゝ満潮みちしほを

飲みつくすとも渴かわくべき

天馬なれよ汝が身を持ちて

鳥なのきて啼なく鳩にほの海

花橘はなたちばなの蔭ふを履ふむ

その姿こそ雄々しけれ

牝馬めうま

青波あをなみ深きみづうみの

岸のほとりに生れてし

天の牝馬あづまは東なる

かの陸奥みちのくの野に住めり

霞うるほに霑すひ風に擦すれ

音おともわびしき枯くくさの

すゝき尾花にまねかれて

荒野あれのに嘆なげく牝馬めまかな

誰たれか燕つばめの声を聞き

たのしきうたを耳にして

日も暖かに花深き

西も空をば慕はざる

誰か秋鳴くかりがねの

かなしき歌に耳たてて

ふるさとさむき遠天とほぞらの

雲ゆくへの行衛ゆきゑを慕はざる

白しろき羚羊ひつじに見まほしく

透すきては深く柔軟やはらかき

まなこ

眼まなこの色いろのうるほひは

吾わが古里ふるさとを忍しのべばか

ひづめ

蹄ひづめも薄うすく肩かた瘦やせて

四よつの脚あしさへ細こりゆき

そたてがみの鬣つやの艶つやなきは

荒あれの野のの空あかに嘆なげけばか

春なとりは名取なとりの若草わかしや

病やまめる力ちからに石いしを引ひき

夏こくぶは国分みねの嶺みねを越こえ

牝馬めうまにあまる塩しほを負おふ

秋あきは広瀬ひろせの川がは添ぞひの

紅葉もみぢの蔭かげにむちうたれ

冬は野末に日も暮れて

みぞれの道の泥に饑うゆ

鶴よみそらの雲に飽き

朝の霞の香に酔ひて

春の光の空を飛ぶ

羽翼つばさの色の嫉ねたきかな

獅子ししよさみしき野に隠れ

道なき森に驚きて

あけぼの露にふみ迷ふ

鋭き爪のこひしやな

鹿あきやまつまごひよ秋山妻恋に

黄葉もみぢのかげを踏みわけて

谷間あへの水に喘あへぎよる

眼睛ひとみの色のやさしやな

人をつめたくあぢきなく

思ひとりしは幾歳いくとせか

命を薄くあさましく

思そひ初めしは身を責むる

強くひきき軛わに嘆き侘び

花に涙をそぐより

悲しいかなや春の野に

湧わける泉を飲み干すも

天の牝馬のかぎりなき

渴ける口をなにかせむ

悲しいかなや行く水の

岸の柳の樹の蔭の

かの新草にひぐさの多くとも

饑ゑたる喉のどをいかにせむ

身は塵埃ちりひぢの八重葎やへむぐら

しげれる宿にうまるれど

かなしや地つちの青草は

その慰藉なぐさめにあらじかし

あゝ天雲あまぐもや天雲や

塵ちりの是世このよにこれやこの

轡くつわも折れよ世も捨てよ

狂ひもいでよ軛くびきさへ

噛み砕けとぞ祈るなる

牝馬あはれのこゝろ哀なり

尽きせぬ草のありといふ

天つみそらの慕はしや
渴かぬ水の湧くといふ

天の泉のなつかしや

せまき厩うまやを捨てはてて

空を行くべき馬の身の

心ばかりははやれども

病みては零おつる泪なみだのみ

草に生れて草に泣く

姿やさしき天の馬

うき世のものにことならで

消ゆる命のもろきかな

散りてはかなき柳葉やなぎはの

そのすがたにも似たりけり

波に消え行く淡雪のあはゆき

そのすがたにも似たりけり

げに世の常の馬ならば

かくばかりなる悲嘆にかなしみ

身の苦悶を恨み侘びわづらひ うら

声ふりあげて嘶かんいなな

乱れて長き鬣の

この世かの世の別れにも

心ばかりは静和なるしづか

深く悲しき声きけば

あゝ幽遠なる氣息にかすか ためいき

天のうれひを紫の

野末の花に吹き残す

世の名残こそはかなけれ

にはとり
鶏

花によりそふ鶏の

つま めどり
夫よ妻鳥よ燕子花 かきつばた

いづれあやめとわきがたく

さも似つかしき風情あり ふぜい

姿やさしき牝鶏の めんどり

かたちを恥づるこゝろして

花に隠るゝありさまに

品かはりたる夫鳥や つまどり

雄々しくたけき雄鶏をんどりの

ときかの色も艶えんにして

黄なる口脣くちばしあしけづめ脚蹴爪

尾はしだり尾のながくし

問ふても見まし誰たがために

よそほひありく夫鳥つまどりよ

妻つまも守るためのかざりにと

いひたげなるぞいぢらしき

画にこそかけれ花鳥はなどりの

それにも通ふ一つがひ

霜に侘寝わびねの朝ぼらけ
雨に入日の夕まぐれ

空に一つの明星の

闇行く水に動くとき

日を迎へんと鶏の

夜よるの使つかひを音ねにぞ鳴く

露けき朝の明けて行く

空のながめを誰たれか知る

燃ゆるがごとくれなゐき紅くの

雲のゆくへを誰たれか知る

闇もこれより隣なる

声ふりあげて鳴くときは

ひとの長眠ねむりのみなめざめ

夜は日に通ふ夢まくら

明けはなれたり夜はすでに

いざ妻鳥つまどりと巢いを出でて

餌えをあさらんと野に行けば

あなあやにくのものを見き

見しらぬ鶏とりの音ねも高に

あしたの空に鳴き渡り

草かき分けて来るはなぞ

妻恋ふらしや妻鳥つまどりを

ねたしや露に羽はねぬれて

朝日にうつる影見れば

雄鶏をどりに惜をしき白妙しろたへの

雲をあざむくばかりなり

力あるらし声たけき

敵かたきのさまを懼おそれてか

声色いろあるさまに羞はぢてかや

妻鳥めどりは花に隠れけり

かくと見るより堪へかねて

背をや高めし夫鳥はつまどり

羽がきも荒く飛び走りは

蹴爪に土をかき狂ふ

筆毛のさきも逆立ちふでげ さかだ

血潮にまじる眼のひかりちしほ

二つの鶏のすがたこそとり

はおそろしき風情なれこれ ふぜい

妻鳥は花を馳け出でてめどり か

争鬪分くるひまもなみあらそひ

たがひに蹴合ふ蹴爪にはけづめ

火焰もちるとうたがはるほのほ

蹴るや左眼さがんの的まとそれて

羽はねに血しほの夫鳥つまどりは

敵うがんの右眼をめぐしつゝ

爪も折れよと蹴返しぬ

蹴られて落つるくれなゐの

血潮の花も地に染みて

二つの鶏とりの目もくるひ

たがひにひるむ風情なし

そこに声あり涙あり

争ひ狂ふ四つの羽はね

血潮のりに滑りし夫鳥つまどりの
あな仆たふれけん声高し

一声長く悲鳴して

あとに仆るゝ夫鳥の

羽はねに血潮の朱あけに染そみ

あたりにさける花紅あかし

あゝあゝ熱き涙かな

あるに甲斐なき妻鳥は

せめて一声鳴けかしと

屍かぼねに嘆くさまあはれ

なにとは知らぬかなしみの

いつか恐怖おそれと変りきて

思ひ乱れて音をねのみぞ

鳴くや妻鳥めどりの心なく

我を恋ふらし音ねにたてて

姿も色もなつかしき

花のかたちと思ひきや

かなしき敵とならんとは

花にもつるゝ蝶ちようあるを

鳥に縁えにしのなからめや

おそろしきかな其の心

なつかしきかな其の情なざけ

紅あけに染そみたる草見れば

鳥の命のもろきかな

火よりも燃ゆる恋見れば
敵てきのこゝろのうれしやな

見よ動きゆく大空の

照る日も雲に薄らぎて

花に色なく風吹けば

野はさびしくも変りけり

かなしこひしの夫つまどり鳥の

冷えまさりゆく其姿その

たよりと思ふ一ふしの

いづれ妻鳥めどりの身の末ぞ

恐怖おそれを抱く母と子が

よりそふごとくかの敵に

なにとはなしに身をよする

妻鳥のこゝろあはれなれ

あないたましのながめかな

さきの樂しき花ちりて

空色暗く一彩毛ひとはげの

雲にかなしき野のけしき

生きてかへらぬ鳥はいざ

夫つまか妻めどり鳥かきつばたか燕子花

いづれあやめを踏み分けて

野末を帰る二羽の鶏とり

松島瑞巖寺ずいがんじに遊び葡萄ぶどう

栗鼠きねずみの木彫を観て

舟路ふなぢも遠し瑞巖寺

冬追遙ふゆじようようのこゝろなく

古き扉に身をよせて

飛驒ひだの名匠たくみの浮彫うきぼりの

葡萄のかけにきて見れば

ぼだい菩提の寺の冬の日に

かたかな刀悲しみのみうれ鑿愁ふ

ほられて薄き葡萄葉の

影にかくるゝ栗鼠よ

姿ばかりは隠すとも

かくすよしなしのみ鑿かの香は

うしほにひゞくいそでら磯寺の

かねにこの日の暮るゝとも

ゆふやみ夕闇かけてたゝずめば

こひしきやなぞ甚五郎

底本：「藤村詩集」新潮文庫、新潮社

1968（昭和 43）年 2 月 10 日発行

1997（平成 9）年 10 月 15 日 55 刷

※ルビの一部を新仮名遣いとする扱いは、底本通りにしました。

入力：佐野女子高等学校 2-1（H11）

校正：門田裕志、小林繁雄

2005 年 5 月 8 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。